

京都府生活協同組合連合会 会長理事
上掛 利博（かみかけ としひろ）先生

社会福祉と協同組合

今回のインタビューは上掛先生にお願いした。京都コンサートホールという文化的環境の中でのお話となったせいか、先生のお人柄のせいか、文化的なレベルの高い内容になった。よき学生時代の過ごし方や社会福祉の理念など興味深いお話であった。法橋さんのインタビューでも感じたがそれぞれの職場で最善を尽くされている姿勢を聞くことは、大学生協や協同組合の可能性を知ることにも通じるように思われる。提言には耳を傾げるだけでなく、実現を目指して努力したい。

名和 先生は京都府立大学公共政策学部の教授でおられるとともに、現在、京都府生活協同組合連合会の会長理事をされておられます。最初に先生のお生まれと幼少期のことをお聞かせいただければと思います。

「鉄の都」に育って

上掛 私は1954年（昭和29年）に福岡県の八幡（やはた）で生まれました。1901年に官営八幡製鉄所ができて、日本の資本主義の発展をささえた労働者の街です。小学校のころは公害問題が深刻で、夜中に工場から煤煙が吐き出されていたため、夏休みの朝のラジオ体操が中止になったこともあるという環境で育ちました。



名和 北九州というところは典型的な工業都市ということができるでしょうか。ご家族が製鉄所に関係されていたことはなかったのでしょうか。

上掛 両親とも鹿児島農家の出身で、戦争が終わって父親は旭硝子で働いていました。ご近所も皆、溶鉱炉のある工場で働いているので、いつも誰か三交代勤務の「夜勤明け」で寝ているので、子どもは「外で騒いではいけない」とよく叱られました。通っていた枝光小学校は、校歌に「今日も七色の煙があがる」と殖産興業を讃えた歌詞が宮本憲一先生の書かれた本に紹介されるような企業城下町でした。

1963年、小学3年のときには、門司、戸畑、小倉、八幡、若松の5つの都市が

対等合併して「北九州市」という人口 100 万人の都市、三大都市圏以外では初、全国で 7 番目の政令指定都市となりました。

名和　そこで先生は、ご近所に配慮しながら地元の学校に通われたわけですね。

上掛　中学校は歩いて 3 分の枝光北中、高校は西鉄電車で県立八幡高校に通いました。父親が裏山に畑を借りていて、米以外の野菜はすべて作っていましたので、明日から定期試験という日曜日も、朝から畑仕事を手伝っていたのを覚えています。

名和　この時代はどこも、家の仕事を手伝うことが普通のことだったのでしょうか。そして全国的にも「鉄」の全盛時代だったのですね。

上掛　そうです。私が小学校 5 年のときに、八幡製鉄所から別れて千葉の君津製鉄所が操業を開始すると、親の転勤に伴って子どもたちも次々に転校してしまい、それまで 6 クラスだったのが、5 クラスにまで減ってしまうという「民族大移動」もありました。

名和　まさに日本の高度経済成長の縮図を体験されたということですね。ところで大学への進学はどうされましたか？

上掛　一年浪人して、1974 年春に京都府立大学に入学しました。当時の国立大学は、入試が 3 月 3～5 日の「1 期校」と 3 月 23～24 日の「2 期校」とに分かれていて、府立大学はその中間の 15～16 日にやる「1.5 期校」ということで、国公立大学を全部で 3 校受験できました。府立大学には全国から受験生が集まっていたので、名目倍率は 40 倍を超えていました。わが家は 3 人兄弟で、長男の私は授業料の安い国公立（当時、府大の学費は年 1.2 万円、国立は 3.6 万円）に進学しなくてはという事情もあって、府立大学の文学部社会福祉学科に入りました。というような経過で、私は親戚のなかでは、初めて大学まで進学させてもらいました。

「自主ゼミ」運動で学ぶ

名和　そういえば、かつて社会福祉は文学部にありましたね。

上掛　はい。当時の府立大学では「自主ゼミ運動」が盛んで、1973 年に女子短大部に設立された生活経済学科の小野秀生先生や成瀬龍夫先生にチューターをお願いして、『資本論』を読むとか、教育学や社会福祉の勉強をすとか、1 週間に 3 つぐらいの「自主ゼミ」で、単位にはならないけれども一生懸命に勉強したという思い出があります。

名和　そのような学び方は、まさに大学生らしい自立した姿勢だと思います。そういう自主ゼミのような学び方はそれまでにあったのでしょうか？

上掛　私は 1 回生から府大合唱団に入っていたのですが、合唱団の先輩たちが 1 年ほど前から『資本論』の自主ゼミをやっていて勧められて参加しました。当時の府立大は学園紛争の終わりかけの頃で、入学式には黒いヘルメットを被った集団がなだれ

込んできて、学長挨拶が途中で中止になったこともありました。

名和　　そういえば京滋・奈良ブロックの「読書カフェ」で先生は『資本論』を取り上げられましたね。

上掛　　学生時代に『資本論』の自主ゼミを4年間やったというのがベースになっていると思います。ゼミで毎週少しずつ『資本論』の現物を読んでいって、とても興味深いと思いました。第1巻は3回くらい、第2巻、第3巻、『剰余価値学説史』まで、全巻を一通り読み通しました。『資本論』には、マルクスが大英博物館に通って研究した膨大な資料が、本文や注にちりばめられているので、経済学を学ぶというより歴史読み物を読むようで、当時のイギリスの労働者階級の生活を知ることができ面白かったのです。

名和　　こんな学びは先生の自信となり後の研究生活に繋がっていったわけでしょうか。

「ケンカは成長の証し」

上掛　　そうした理論学習に加えて福祉の実習からも多く学びました。当時、福祉を学ぶ全国の学生の憧れの場であった「与謝の海養護学校」に、府大からは初めて私と友人の二人が寄宿舎で実習をしました。ある日の引き継ぎの会議で寮母さんが、「今日はA君とB君が喧嘩をしまし



た。自分の要求を出すことができたから喧嘩ができた。すごい！」とおっしゃる場面に遭遇しました。「どちらが悪い」という議論ではなく、「すごく成長した」という捉え方があるんだと驚いた経験があります。与謝の海養護学校の教頭をされておられた青木嗣夫先生の『僕、学校へ行くんやで』（鳩の森書房、1972年）という本にも大きな影響を受けました。地域に根ざしながら学校づくりの「運動をすること」が大切で、民主的な人間関係がないと学校はなりたないのだということを、学生時代に学びました。

4回生で指導教授だった池田敬正先生（歴史学）からは「社会福祉は総合科学なので、何か基礎科学をふまえるべきだ」と教わり、大学院では経済学を専攻することにしました。文学部からの転学部で2年間の浪人を経て、社会政策を研究するため岡山大学大学院の修士課程に進みました。M1の5月に、府立大学で同級生だった妻と結婚、その後7年間扶養してもらいました。岡山では向井喜典先生、博士課程は立命館の経済学研究科で塩田庄兵衛先生の下で勉強しました。

名和　　つまり先生は公立、国立、私立のすべてで学ばれたわけですね。岡山の印象は、いかがでしたか？

上掛　　私の出身地の九州では台風がよく来て、瓦が飛ぶような強風になると「血が騒

ぐ」というくらいでしたが、岡山は「米のなる木」というお菓子があるぐらい自然環境が温暖なところでした。岡山大の院では、社会政策の向井先生以外にも、経済原論の高木彰先生、経済学史の八木紀一郎先生、財政の坂本忠治先生、経済史の下野克巳先生などからマンツーマンで指導していただき、連日の報告で準備は大変でしたが充実した2年間でした。修士論文は、関西学院の大前朔朗先生から資料をお借りし、18世紀末のイギリス救貧法について書きました。

博士課程は、幸運にも立命館に入れていただきました。当時の立命には労働問題や社会政策を研究される先生がたくさんおられて、私の指導教授は塩田庄兵衛先生でしたが、他に戸木田嘉久先生と三好正巳先生にもついていただくという「三人指導体制」でした。また、経営学部には坂寄俊雄先生や浪江巖先生、産業社会学部の藤原壮介先生などもおられて、労働問題研究会で勉強することができました。

名和 そうやって先生は恵まれた環境で研究されたわけですが、そのあとどうされましたか？

上掛 そのころはOD問題が深刻で、大学院を出てもなかなか就職できない状況でした。オーバードクターを2年やりましたので、32歳まで定職に就けませんでした。大学院修了後の5年間は奨学金の返還猶予があったので、なんとか5年以内に就職できるよう院生は努力していました。私は幸運にも2年間のOD生活を経て、府立大学の女子短大部に就職することができました（15年勤めた時点で奨学金は返還免除）。



名和 そうして先生はめでたく母校に就職することができたわけですね。ところで研究者としての先生から見て、京都のどこがおもしろいと思われますか？

「発達する権利」

上掛 まず、京都は大学が多く、学生数は人口の1割程と思いますが、そうしたなかで学生時代も教員になってからもずいぶん大事にしてもらったという思いがあります。専門の福祉の分野でも、京都は日本で先駆的なことをやってきた歴史があります。たとえば、岩倉の精神障害者施設はじめ、ライトハウス、聴覚障害者のための施策を推進するなど、福祉分野でも先進的なところでした。近年では、養護学校を卒業したけれど行き場所がない、家に籠こもっているのは良くないということで、親や先生たちがお金や資材を出し合って自分たちで運営する作業所をつくるという「共同作業所づくり運動」が生まれました。

1970年代に「ポストの数ほど保育所を！」をスローガンとして革新自治体の下で広まった共同保育所も、保育所づくり「運動」として進みました。このようにして、日本のそれまでの福祉のありようを変えていった時代です。京都大学では「朱

い実保育園」の取り組みがありました。母親の働く権利と、子どもの発達する権利をどちらも保障しようという新しい実践でした。保育に欠ける「かわいそう」な子を救うということではない「福祉を創る」運動でした。

名和 それら京大での話は、野村秀和先生や北野和男さんからもお聞きしました。

上掛 府大の女子短大部には清水民子先生もおられ、従来の託児所とは異なる保育所を創ってきたということでした。

名和 大学生協、協同組合とのかかわりはいつごろからでしょうか？

「毎日2回、書籍部へ！」

上掛 学生時代は特に目だったことをしていません。岡山大の院生のころは、文部省には「中国・四国地方の大学には生協をつくらせない」という方針があったそうで、大学生協はありませんでした。その後、立命に入学した頃に生協の「3億円事件」が起きましたが特に関わりはありませんでした。ただ、指導教授の三好先生からは「生協の書籍部に1日に2回は行きなさい」と言われていましたので、毎日「1度」は書籍部に通っていました。赴任した府立大学の生協は規模が小さかったので、立命や同志社など他大学の大規模な書籍部で新刊書の現物を見て購入していました。経済学や福祉の本だけでなく、さまざまな分野の書籍を手にとってみる事ができるということは、大変ありがたいことでした。

私が入学した1974年ころは『読書のいずみ』（全国大学生協連の推薦図書ガイド）が新書版で発行されていて、それを見ながら「読むべき本」を○印で囲んで、手に入れたら斜め線で消し、読み終わったら×印をつけるという具合にして、本棚を一杯にするのが楽しかったという思い出があります。そのころは、大学生協オリジナルで5段とか6段の「スチールの本棚」が売られていまして、友人達の下宿へ行って議論しながらも、本棚を見てどのくらい本を読んでいるのか眺めたりしたものです。あまり高い本は買えないので、文庫や新書が中心で、古本や巡りもしました。あとは、合唱団の幹事長（部長）として、70名近い部員をまとめて、4年間ステージに立ちました。最も思い出深い曲は、ブラームスの『ドイツ・レクイエム』です。

「あなたが講義しなさい」と言われて

名和 先生が府立大学の教員となられてから、どのような授業をされようと思いましたか？

上掛 4回生の時、ある講義で非常勤の先生が法律の説明ばかりされるので、私は「書いてあることは読めばわかるので、なぜそうなったのかを知りたいのです」と何度

も質問したものですから、とうとう先生が怒り出して「そこまで言うのだったら、あなたがやってみなさい」と言われ、授業時間の半分を使って「社会福祉とは何か」と教壇で話したことがあります。そういう体験もあって、自分が学生に教える立場に立った時には、学生の知的好奇心に応える授業をしようと思いました。もっとも、「教科書に書いてある通り教えてほしい」とか、「先生が選んだ教科書なのに、ここは違うとか批判するのはおかしい」と言う学生も数名いたので、多様な考え方が面白さがわからない（面白さを理解したくない）学生も一部にいます。

ノルウェーの人々の暮らしぶり

上掛 1994年、40歳のときに、はじめて在外研究をする機会があり、まさしく「目から鱗が落ちる」体験をしました。家族と一緒に、南ノルウェーのリレサンと



という人口8,500人の小さな町に1年間滞在して、そこで福祉についての調査研究をしました。カメラとメモを片手に自治体の行政すべての場面を見せてもらい、友達になったノルウェー人の家の冷蔵庫の中まで見せてもらって、普通の人たちの暮らしがどうなのかをつぶさに観察しました。

そうして、ノルウェーの福祉の水準が高いのは、①普通の人々の日常生活の質が高く、その結果として福祉の質も高いということ、②女性の就労率が高く、社会で活躍していることから、保育や高齢者、障害者への施策を通じて、女性が働きやすい社会になるように政策の優先順位を変えていったという、この2つが北欧福祉社会の基本であることを学びました。

これ以降、私の講義は、毎回ビデオやスライドを使って、受講生に見てもらい、自らの頭で考えてもらうという方式になりました。

名和 40歳当時の体験が、その後の先生の教育や研究に反映していったのですね。

上掛 物質的な豊かさだけでなく、労働時間が短く基本的に残業がないので、生活時間に「ゆとり」があり、みんな夕方の4時とか5時には家に帰って、家族との時間を過ごします。男女ともに「自由な時間」（余暇時間、教育に使う時間）を持っているということが豊かさの証だと思いました。また、空間についていえば、ノルウェー人は、世界で一番広い家に住んでいますし自然環境も大事にされており、住環境の面でも「ゆとり」のある生活ができています。1994年当時、ノルウェーの人からは「我が家の家電製品や車は、皆メイドインジャパンだ。そんな豊かな国から、なぜこんな北の端の国に学びに来るの？」とよく質問されました。私は、日本の福祉の遅れた現状（民主主義の質の違い）を説明するしかありませんでした。

名和 日本の貧しさが見えてきますね。

上掛 ノルウェーの人口は 450 万程で京都府と滋賀県を合わせたくらい、日本の 30 分の 1 の規模です。日本で福祉の研究が進んでいたのはスウェーデンとデンマークで、ノルウェーとフィンランドを研究対象にする人はあまりいなかったのので、あえてノルウェーを選びました。ノルウェーの人たちは日本人と同じく恥ずかしがり屋で、親切な国民性も共通しています。今年の夏も、20 年の間で 10 回目になりますが 2 週間ほど調査に行きました。

「選別主義」の福祉を越えて

上掛 福祉のあり方でいうと、日本では「真に福祉を必要とする人に手厚い福祉を」という「選別主義」に立っています。高齢化社会では普通の人みんなの暮らしを豊かにすることが求められているのに、「真に必要とする人だけ」では成り立ちません。「かわいそうな人」にお恵みをとというのは 100 年前の福祉の考えですが、日本では今もこれが通用しているわけです。北欧諸国は「普遍主義の福祉」の立場に立っていますが、誰もが年をとって社会のお世話になると考えて、社会を人間的なものにつくり変えるという「福祉社会づくり運動」が必要だと考えています。それは協同組合運動とも重なるところがあります。社会福祉の仕事そのものが、社会をよりよくするもので、問題はハンディのある人の所で現れますが、目の前の問題を解決しながら、みんなの幸福の為に根本から問題を解決して将来の人たちに人間的な社会を伝えるというのが、ソーシャルワークの考え方だと思います。

名和 先生はそういうお考えのもとで府立大学生協の理事長をされてきたということでしょうか。

上掛 生協との関係でいいますと、最初は男女平等問題にかかわって日本生協連の女性評議会から依頼があり、ノルウェーの女性の社会的地位についてお話したことがあります。そして、京都生協の末川千穂子さん、おおさかパルコプの谷さん、ならコプの仲宗根さん、コプえひめの立川さんたち関西の女性トップの皆さんから声がかかるようになりました。

その後、京都生協の学識理事を 10 年間務めました。2006 年に府大の南出先生（前理事長）のお誘いで、京都府立医大・府大生協の副理事長を 2 年、理事長を 2 年、理事を 1 年、あわせて 5 年間は大学生協に関わらせていただきました。また、今年は「くらしと協同の研究所」が関西の生協を中心に設立されて 20 年になりますが、私は研究委員会の代表や「生協と福祉」という分野で研究活動にかかわってきました。

名和 そういなかで、昨年からは京都府生協連の会長になられたのは自然の流れといえるでしょう。そこではどういう抱負をお持ちでしょうか。

上掛 一般の人からは、「京都生協」と「京都府生協連」の違いが分かり難いようです。京都府生協連は5種類の会員生協から構成されており、一番数が多いのは大学生生協で11（大学生協京都事業連合と10の大学生協）、地域生協3（京都生協、生活クラブ京都エル・コープ、コープ自然派京都）、医療生協3、職域生協1（府庁生協）、共済生協2の合計20の生協がつくる連合体です。したがって、京都府生協連（府連）は、「生協」の連合会として行政やマスコミ等の窓口の役割を担っており、京都では他に「農協」「漁協」「森林組合」の連合会が同様の位置にあって、年1回「協同組合デー」を一緒に開催しています。また、日本生協連の「関西地連」（関西・北陸・愛知）の会議に、各府連・県連の代表が集まります。

「地域」を主語に置き換えて

上掛 昨年2012年は「国際協同組合年」でした。これまで「生協が」と主語で語られることが多かったなかで、いまでは「地域が」生協という組織を使って何ができるか、というように、主語が変わってきて生協の役割が新たに見えてきたことが大事な点ではないかと考えています。また、大学生協を経験した学生さんたちが社会に出て、地域で生協の役割をひろげていくこともできるのではないかと思います。

名和



協同組合原則の7番目が「地域へのかかわり」となっていますが、今まさに地域とのかかわりが重要になってきていますね。大学生協では昨年から「協同組合論」の寄付講座をつくり学生の学ぶ場を提供してきました。

上掛 京都ならではのユニークな活動だと思います。今年から、京都府の消費生活安全センターと府連・大学生協とが協力して、消費者市民社会の実現に向けたセミナー等を開催しています。消費者問題を考えるきっかけとしては、学生向けの消費者被害防止の啓発パンフ作成などもあります。問題を狭くとらえるのではなく消費者市民社会における主人公として、自立した人格形成をめざすというように広くとらえていくことが重要だと思います。主体的な消費者の姿について、学生さんと広く議論できればと思います。

名和 ところで先生は、会議が始まる前に必ずといっていいほど、いろんな書籍や資料を紹介されていますね。

上掛 わたし自身が、決まり切った内容の挨拶は聞きたくないと思っているので、せっかく挨拶する機会が与えられたのであれば、他では聞けないことを一つでも二つもお伝えできると良いなと考えているからです。

名和 最後に、先生から大学生協にやってほしいこと、ご要望はありますか？

「積ん読」のススメ

上掛 医大・府大生協の理事長になった時に、『読書のいずみ』の今日版を是非つくって欲しいと要望しました。また、スチール本棚が売ってないので何とかならないかと思いました。学生の部屋に本棚がないのは寂しいと考えるからです。私は学生さんに「積ん読」（つんどく）のすすめをしています。手元に本が置いてあれば、何かのきっかけで読む機会ができます。たしかに、通信費負担が高いこともあって最近の学生さんはあまり本を買えないとか、買わないと聞きますが、それでも本や新聞を読む習慣を付けることが大切だと思います。そこで、例えば大学生協で新聞購読の申し込みをすると少し安く購読できるような仕組みができないかと期待しています。

学生は「画面で見ます」と言いますが、デジタルの画面と紙の新聞や本の違いは明白で、線を引いて読んだり書き込みをしたりして理解を深めるとか、周辺の情報までも目に入ってきて認識が広がることは、デジタルでは得られません。講義のシラバスが電子情報になって、学生は先輩や友人からの情報だけで登録を判断して、他の科目には目もくれないという傾向にあります。冊子の場合は、いろいろと他のページの「わき道」に目がいって、そこで新たな「出会い」があるかもしれないのに、そうした楽しみが少なくなっています。

名和 数年前から京滋・奈良ブロックとして「読書カフェ」をそれぞれの大学ごとに開催してもらい、府立大学でも上掛先生からご報告していただいたこともありました。ひきつづき2順目の開催をめざしていきたいと思っています。その他にはいかがでしょうか？

上掛 もうひとつ、夏・冬休みの「テーマのある旅」を充実できないか期待しています。府立大学のように小規模な大学では、海外研修の機会が十分ではありません。北欧の福祉とかフィンランドの教育、ドイツの環境問題など、いろいろなテーマで学ぶことができるのは魅力的です。大学生協の「テーマのある旅」は、現地で専門家のレクチャーを受けたり、個人では訪問できない施設なども視察したりして、一般の観光旅行では得られない貴重なプログラムとなっています。全国の大学生協が連帯して取り組むことで、内容も一層豊かになり、もう少し気軽に行けるようになって、全国各地の学生相互の交流も進んだら素晴らしいなと思います。

名和 先生がこれまで歩んでこられた教育者・研究者としての足どりと、生活協同組合がこれから果たすべき課題について縦横無尽に語っていただき、ありがとうございました。

(2013年10月11日、京都コンサートホール喫茶にて)